

Life Design Focus

生きる力をつける家庭科・ライフデザイン

第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 下開千春

<ライフスタイルの多様化とライフデザインの必要性>

「家庭科とは、生きることを学ぶことです」。階段教室での家庭科教育の講義の初日。教授による第一声を今でも鮮明に覚えている。近年、その言葉の重みを強く感じるようになっていく。

その理由は、晩婚化や晩産化、未婚化、高齢化など、人々のライフスタイルが多様化してきていることにある。弊社の『ライフデザインレポート』2008年9-10月号の巻頭言でも述べているように、これまで理想とされた画一的、同質的なライフスタイルが崩れ、人々が将来にわたっての生活設計をたてることが難しくなっている。例えば一流の大学に入り、大企業に就職したとしても、生涯その会社に勤められるか分からない。伝統的な性別役割意識や結婚観、家族観などの価値観が変化し、公的年金や健康保険についても、将来どれだけの年金・給付が受けられるか分からない。さらに、リーマンショック後の世界的な経済不況から、不安は高まる一方である。

こうした時代であるからこそ、生涯にわたり、どのような職に就くのか、長い老後に対してどのように備えるのかなど、自ら考えることが求められている。

<生きる力をつける家庭科教育の現状>

生きることを学ぶとされる家庭科が、男女ともに公立高等学校で必修科目となったのは1994年である。1993年以前は、女子のみが必修とされてきた。そのため、現在、就学児を持つ保護者のうち、父親の多くは家庭科の履修経験がない。高校生の子どもを持つ保護者や祖父母世代からすると、子どもたちが家庭科を学んでいること、さらにはどのような内容を学んでいるのかについて、わからないというのが実態だろう。

高等学校の家庭科においては、2010年に新学習指導要領（家庭科）が出されている。この新学習指導要領（家庭科）は、2013年4月1日の入学生から段階的に適用される。導入は少し先になるが、家庭科の学習目標は次のようになっている。

「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。」（文部科学省，2010，「高等学校学習指導要領解説 家庭編」）

各ライフステージの課題を達成しつつ発達するという生涯発達の考え方を重視する点は従来と同様であるが、「人の一生を時間軸でとらえるとともに、生活の営みに必要な金銭、生活時間、人間関係などの生活資源や、衣食住、保育、消費などの生活活動にかかわる事柄を空間軸としてとらえ、各ライフステージの課題と関連付けて理解させることが重要」としている点が特徴となっている。

新学習指導要領（家庭科）は、「家庭基礎」「家庭総合」「生活デザイン」（旧「生活技術」）の3科目で構成され、それぞれの目標と内容は次のようになっている。

「家庭基礎」の目標は、「人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる」ことにある。この科目では、（１）人の一生と家族・家庭及び福祉、（２）生活の自立及び消費と環境、（３）ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の3つの大項目で構成されている。

続いて「家庭総合」の目標は、「人の一生と家族・家庭、子どもや高齢者とのかかわりと福祉、消費生活、衣食住などに関する知識と技術を総合的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる」ことにある。この科目は、（１）人の一生と家族・家庭、（２）子どもや高齢者とのかかわりと福祉、（３）生活における経済の計画と消費、（４）生活の科学と環境、（５）生涯の生活設計、（６）ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の6つの大項目で構成されている。

「生活デザイン」の目標は、「人の一生と家族・家庭及び福祉、消費生活、衣食住などに関する知識と技術を体験的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる」ことにある。この科目は、（１）人の一生と家族・家庭及び福祉、（２）消費や環境に配慮したライフスタイルの確立、（３）食生活の設計と創造、（４）衣生活の設計と創造、（５）住生活の設計と創造、（６）ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の6つの大項目で構成されている。

新学習指導要領（家庭科）では、以上の3科目の履修について、学校側で特定の科目に決めてしまうのではなく、複数の科目を開設し、生徒が選択できるようにすることが望ましいとしている。複数の科目が開設されている学校の生徒は、適正や興味・関心などに応じて、1科目を選択して履修することができる。

＜今もとめられる生きる力＞

以上のように、教育の現場では、家庭科を通して、人生の時間軸を中心に、空間軸としての生活活動の事柄を認識・理解する力をつけることが求められるようになってきている。人生の時間軸は、ライフデザインと表現することもできる。ライフデザインとは、「あらかじめ決められた1本の人生レールの上をすすむのではなく、世の中の

現状と変化をふまえて、自分の価値観に合った人生を主体的に選び、実現していくこと」（第一生命経済研究所『ライフデザイン白書 2011』より）を意味している。

そのため、ライフデザインを描くには、時代の変化を捉え、その変化を見据える能力を身につけることが求められるといえる。その上で、どのように生きていきたいのか、どのような生き方が可能であるのか、そのために必要な資格や選択には何があるのか、様々な情報を集める力をつけていくことも必要となる。時代の流れをつかみ、先をよむ力を土台としながら、自らが望む生き方を実現していく力こそが、時代の変化の中で対応力となる。ライフスタイルが多様化した現代であるからこそ、このような生きる力をつけることが求められている。

＜『ライフデザイン白書 2011』の出版の紹介＞

最後に、ライフデザインを考える一つの資料として、当研究所が2010年12月に発行した『ライフデザイン白書 2011』を紹介する。この白書は、当社が1995年から行っている定点調査であり、家庭、地域社会、就労、消費、老後など、ライフデザインにまつわる様々な基礎的データとともに、日本人の生活の変化を捉え、わかりやすく解説したものである。

第7回目の発行となる今回は、家庭科をはじめとし、社会科やライフデザイン学科などの教育の場で活用してもらえるよう、内容を大きく変更した。見開きで図表と解説をまとめ、授業の資料としても容易に活用されるよう工夫している。本書が、少しでも多くの教育の現場で活用され、多くの若い方々の将来を考える資料となるよう望んでいる。

『ライフデザイン白書2011』（編：第一生命経済研究所、発行：ぎょうせい）のコンテンツ



- 第1章 家族
- 第2章 地域社会
- 第3章 就労
- 第4章 消費
- 第5章 健康
- 第6章 高齢期の生活
- 第7章 人生設計・リスクマネジメント

附属資料

「今後の生活に関するアンケート」の概要
第一生命「ライフサイクルゲーム」のご紹介

（しもびらき ちはる 副主任研究員）